

第 62 回神奈川県高等学校演劇発表会 公開用講評文

生徒実行委員会の講評担当者は、各上演の幕間に公開討論を行い、高校生の皆さんが創り上げた劇を、同じ高校生の視点で受け止め、舞台から伝わったものの正体を追求すべく、それぞれの想いを表現、共有してきました。「生徒講評」は審査とは異なるため、批判や評価を目的とはしていません。私たちが舞台から受け取ったなにかを、率直に表現、そして共有することを大切にしています。もしかすると、上演された皆さんの意図とは異なる受け取り方をしているかもしれませんが。ですがそれも、観劇した高校生の、素直な感想として受け止めていただければと思います。

【全体講評】

県大会の舞台に立った 13 校の皆様、本当にお疲れ様でした。皆さんが 60 分にかけての思い、沢山受け取りました。ありがとうございます。全ての公演から受け取ったものは、「特有の幸せ」でした。それは、劇中だけでなく、私達が生きる世界にも共通するもので、本ベルが鳴り、緞帳が開いて、照明、音響、そしてキャストが動く。そうやって劇は続き、ときには涙を流して、やがて緞帳が閉まってゆく。毎回のように、「ああ、終わっちゃった。」と、寂しく切なくなりました。ですが、毎回のように、それぞれの劇の登場人物から、様々な幸せを学べました。例えばそれが、自分を貫くことであつたり、いずれ失われるものの大切さであつたり、劇ごとにテーマの違いはあれど、いつでも感じることができるような幸せではないことは確かです。13 通り以上の幸せに気付かせていただいて、大変感謝しています。ありがとうございました。

【上演校別講評文】

上演 1 『今日も舞花がいちばんかわいい』 日本大学高等学校

周囲の意見に流されがちな現代社会において、物怖じせず自身の信念を貫き通そうとする登場人物たちの姿勢から、勇気もらいました。また、他人との対立を避けるために意見を合わせることも大切ですが、時には、自分自身の考えをしっかりと述べるのが大切であるということ、この作品から気付かされました。

上演 2 『ねことひとの小さなあくむ』 県立相模原弥栄高等学校

対話をする事の大切さについて考えさせられる作品でした。辛いことがあったらお互いに意見をぶつけ合う、感情を表現することが大切だとこの劇を通して実感できました。主人公のねこのサチくんのように、少しでも力になりたいという気持ちを日々持って生きていきたいと思えます。

上演 3 『雨ざらし』 県立神奈川総合高等学校

差別をなくそうとしても無意識に差別をしてしまうリアルな人間性を表現した作品でした。自他の外見に囚われ、その本質に気づけず、自分さえよければそれでいいという言葉は私達に呼びかけているようで、差別を見て見ぬふりしてしまった私達に深く印象に残り、今一度差別について考えさせられました。

上演 4 『我夢想』 県立西湘高等学校

進路希望調査書の提出をきっかけに、やりたい事や好きな事があつたとしてもそれを仕事に繋げていくことの難しさが描かれ、大人や夢を追いかける友人との会話を通して自分が本当にやりたい事を見つけていく物語でした。仕事として稼いでいかなければならない現実のハードルがありながらも、自分の本当にやりたい事は何かと自分の進路を見直していく大切さをこの物語から強く実感しました。

上演 5 『透明人間』 逗子開成高等学校

「面白い！」この一言に尽きます。ですが、ただ面白いだけではなく、ゾッとする恐怖を感じる場面もありました。透明人間になっても完全に人間性を捨てられない皮肉や、憧れから犯罪に手を染める場面など、リアルに感じる場面もあり、「こうなれたら」という願望をどうにか実現しようとする姿に切なさを感じました。

上演6 『楽屋～流れ去るものはやがてなつかしき～』 白鷗女子高等学校

どんなに憧れ努力しても必ず報われるわけではなく、報われたとしても、そのことが新たな葛藤や苦しみを生み出してしまおうという、人生の難しさについて深く考えさせられる作品でした。また、報われても報われなくても、全力で努力したという事実は、きっと懐かしくて良い思い出になるという思いも込められているように感じました。

上演7 『フツウの私とフツウじゃない私たち』 県立岸根高等学校

盲目のアイが役者として参加することを巡り、部員たちがぶつかり合う姿から、人によって「普通の基準」は全く異なり、自分の普通を人に押し付けてしまうことは心配や善意の言葉でも、却って相手を傷付ける可能性がある事を知り、自分はどうのように人と関わるべきかを考え直すきっかけになる作品でした。

上演8 『自分クエスト』 県立上溝南高等学校

AIに支配された新時代とそうでない旧時代の対比が分かりやすく、感情があって考えることができる今の世界で、より今の大切さや未来のあり方、「幸せ」について深く考えさせてくれた作品でした。同調圧力と個の尊重という今私たちに求められている事の矛盾を考えさせてくれるきっかけにもなりました。

上演9 『積乱雲の向こう側』 県立海老名高等学校

この作品は、青春とは何なのかをみつける物語だと感じました。青春は積乱雲のように先が見えず不安や辛さ、苦しさを感じてしまうものの、成長して振り返ることで積乱雲がソフトクリームのようにみえるように楽しかったと感じるのだと改めて気づかされました。

上演10 『昭和みつぱん伝 浅草・橋場二丁目物語』 県立住吉高等学校

戦時中の家柄の良い少女と女中の娘の物語でした。印象的だったのは兄が戦地へ赴いた時、戦場へ行って来てよかったと少女は言っていたものの、兄の死を知った時思い詰めていた所です。しかし翌日には娘からは何もなかったように見えました。家柄や時代故にそうしていたと思い、私達と同じ人間、子供にそうさせる時代は残酷だなと感じました。

上演11 『グッドボーイ～旅立ち』 県立茅ヶ崎高等学校・鎌倉学園高等学校

境遇や立場が違えば抱える苦しさも違い、個々人の“努力”の量が違えば物事への考え方も違ってくる。そのすれ違いを、じっと見守る60分間でした。人間関係がなければ成立しない日常生活や演劇の世界で、相手の背景を理解しようと見つめることで生まれる絆を、大切にしようと感じさせられました。

上演12 『エンとデビ』 法政大学第二高等学校

私たちが持っているイメージとは正反対な天使と悪魔が学生である友達と出会って、自分なりの生き方を探していく劇でした。肩書きに囚われずに生きていこうとする登場人物たちから、個の重要性や第一印象が全てじゃないと感じられました。また、見た目からの印象が二転三転するところも面白かったです。

上演13 『ラフ・ライフ』 神奈川大学附属高等学校

「誰も傷つかない優しい漫才」の練習を通して自分達ではどうしようも無い問題に立ち向かう姿にとても心を打たれました。また、「死んでいないなら可能性はある」という言葉は、努力が報われず悔し涙を流した私達に前を向く勇気を与えてくれました。